

あれももう一人の自分だった

子どもが調べて書いた自分史・十年史

「自分の知らない自分に出会った」

自分さがしの旅に出かけたさやか

「1995年12月17日日曜日、私とお母さんは新宿から千葉行きの電車に乗りました。行き先は新検見川、三才まで仲良しだったという杏奈ちゃんに会いに行くのです。まだかな、まだかな～、と思って知らない景色をながめていました。どんな子だったかな～、もうほとんどおぼえていないので、時々来るカードや写真を手がかりに色々そうぞうしてみました。杏奈ちゃんは私が赤ちゃんの時に、公園で初めて友だちになった子です。お家のつごうで遠く千葉県に引っ越ししてしまい、お別れしました。杏奈ちゃんと遊んだことはおぼえていないけれど、大きなト

ラックが来てお別れした日に、雨がふっていたのと、しばらくして杏奈ちゃんの家の前を通った時、

『あそこには、今、だれが住んでいるのかなあ？』

と思ったことを、今でもかすかにおぼえています。

秋に私がとつぜん手紙を書く気持ちになったことで文通が始まって、7年ぶりに会うことになったのです。

待ちきれない気持ちになったころ、新検見川の駅につきました。かいさつ口が見えるとおかあさんが

『杏奈ちゃん！！』

と私の顔を見て、少し早足になりました。はずかしいようなこまった気持ちで歩いて行くと、杏奈ちゃんのおかあさんが『紀香ちゃん！大きくなって～！』と私のほっぺたや頭をいっぱいなでました。うちのおかあさんを見ると、ニコニコ杏奈ちゃんを見ながらなみだをうかべていました。私は少しふしぎな気持ちになりました。杏奈ちゃんの家に着くと、おとうさんも、おばあちゃんも出むかえてくれました。私は本当のことを言えば、ぜんぜんおぼえていないので、『はじめまして』の気持ちなのに、大人たちはみんな私のことを知っているようです。思い出話しの私も、いっしょに見た赤ちゃんの時のビデオの中の私も、本物の私だけど、私の知らない私でした。

私の生きた10年の中に、あたりまえだけど私の知らない私がいいて、私が知っている私もいます。いろんな人に話を聞いて、いろんなことを手がかりに、自分さがしをしてみます。」

富岡さやかは三才まで友だただった杏奈ちゃんを訪ねて千葉まで行ってしまった。そこで出会った自分は確かに本物の自分ではあるのだが、私の知らない自分だったと言う。まわりの人たちはみんな私のことを知っている。でも私にとっては「はじめまして」なのだ。そんな出会いがふしぎで面白くなってしまったさやか。どんな自分に会えるのか?! チョッピリいやかなり楽しみな「自分さがし」の旅に出かけることになった。

総合学習『私・ぼくの10年史を書く』 1、ねらい (1) 10年間育ってきた自分の歩みを調べて書く。(2) たくさんの人に育てられ、たくさんのできごとをとおして育ってきた自分を書く。(3) 自分がかげがえのない命を持った一人の人であることをつかむ。2、どのようにやるか (1) 調べる <聞く> 家族の人、親戚の人、友達、小学校に入る前の幼稚園や保育園の先生などいろいろな人に思い出やできごとを聞いてメモをする。 <思い出す> アルバムやビデオ、昔のおもちゃ、作ったり書いたもの、着ていたものなどを見ながら思い出してメモをする。(2) 書くための「設計図」を作る <たとえば> 生まれる前・・・生まれた時のこと・・・赤ちゃん・・・0才のころ・・・0才のころ・・・幼稚園・・・小学校に入ってまとめ・・・10年間をふりかえって思うこと (3) 書く 原稿用紙に書く。(4) 印刷製本する *ワープロで打つ・・・自分で打つか、家族の人に打ってもらう *印刷製本する (5) みんなで読み合う

総合学習「川のたんけん」が終わって、2学期もおしつまった頃、上のような提案をした。さやかは待ってましたとばかりに、さっそく動き出したのだった。

冬休みから3月まで調べて、書いて、読んで、聞いて、考えた。3カ月間の取り組みとなった。その間、お父さんやお母さん、おじいちゃん

やおばあちゃん、おばさんやおじさんに至るまで家族の方や身近な人々に、自分の生い立ちを聞いたり、資料を整理してもらったりと大変お世話になった。

昔お世話になった人にもできるだけ聞いてみようという提案したら、保育園の先生に手紙を出した人もいた。幼稚園の先生や病院の先生、団地で近くにいたお友達やおじさんおばさんを訪ねたり・・・とさまざまな活動が始まった。

のうせいマヒは治せません

「1985年9月14日、横浜の梅内産婦人科医院で、午後2時二十三分に父飯田隆、母李枝の間の長男として生まれる。・・・」哲が堂々とした声で読み始めた。下肢に障害を持つ彼の生い立ちには何か気になるものがあったのだろう。みんな真剣に聞いている。「書き出しがかっこいい!」まずは第一の声。

「1986年8月10日2～3歩歩きました。歩きになれてからもよくころびました。お父さんは、そばで見ていてとてもあぶなっかしい様子を見て、自然に手が動いてしまっていました。・・・」

「小さいころ転びやすかったので林万り先生にしんさつしていただきました。・・・先生のしんだんはかるいのうせいまひとのことで、お父さんもお母さんもすぐには信じられませんでした。」

脳性麻痺について次々と質問がでる。哲も私も一緒に懸命に説明する。

「脳にショックを受けたり、酸素がいなくなったり、細菌が入ったりして脳の一部が正常に働くなる。そのために身体の一部の働きが悪くなる

■マヒする。お母さんのお腹の中にいるときか、産まれる時か、産まれた後（2週間以内）のどこかでおきる。」

「どうやって直すの？」

「いい薬や上手な医者はいないの？」

そんな質問も出た。

「直接その働きをなおしたりもとどおりにすることはできない。それをおさえる他のはたらきを強くすることをします。それが訓練です。」

もとどおりにすることは出来ない、訓練で他の力をつけるしかない、と堂々と応える。つらい訓練をくぐりぬけてきたものだけがいえる言葉の響きがあった。

「1才9カ月のときに、お母さんと近くのふじ公園に遊びに行った時のことです。公園の砂場のとび石をとび回ろうとしたとき、足が引っかかってころび、おでこを石の角にぶつけて切ってしまいました。病院でのきずの手当では4針ほどぬう大けがでした。また家のげんかんでもころび、頭の後ろを三針もぬう大けがもしました。林万り先生のしょうかいで、2才になる前の8月から9月まで、ぼくはお母さんと京都の聖ヨゼフせいし園に入院してころばなくなるような歩き方になるために渡辺先生や家森先生にみていただきました。お母さんは毎日お父さんへ手紙を書いていたそうです。はがきに中の話を聞いたり入院したときの記ろくを見て、昔の自分は、今ぐらいにしっかりと歩けるように、大変な努力をしていたんだとはじめてきちんとじっかんした。でも1日4回のくんれんは大変でした。・・・」

読みながら、聞きながら、自分や友だちの育ちが見えてきた。よみがえってきた。じっかんできた。母や父のねがいや苦労も少しずつわかってきた。

昔と今が少しはつながっていた

彩峰に妹ができた。初めて会いに行った時「妹にお母さんをとられると思ったのか、赤ちゃんはむしして、持ってきたおもちゃで遊んで自分のことばかり話していました。」懸命に自分を主張していた。これもあの時の本当の自分だった。4年生になって「魔法の鈴」を歌ってモーツァル

トに興味を持ち始める。「大きくなったら作曲家になってみたい」と夢を持つようになった。そんな一つひとつの積み重ねが今の彩峰をつくってきたんだと思った。

5才の時、運動会でふらふらリレーをやった。(5キロぐらいのリュックを背負ってゴールまで走る)「その時はすごい重いと思ったが今はそんなに重いとは思わない」と遼はいう。重さを通して自分の成長を事実で確かめられたのだと思う。

3才のころ。洋之は「自分の見たこと、思ったことをさかんに言葉で表現」していた。テーブルの上でころがる卵を見て、『お母さん、ゆれるから、ゆれたまご っというんだね。』とまわりの大人たちを驚かせていた。言葉を窓口に成長をみた。

健太は加川先生に読んでもらった宮沢賢治の本の影響で、宮沢賢治の詩が好きになってしまった。恵は2年生のパン作りがきっかけとなって、おかし作りが好きになった。9才の誕生日には自分でショートケーキを作り、十才の誕生日にはフルーツケーキを作るまでになってしまった。そんな一つひとつのできごとが今の自分を育てていることに気づいてきた。そういうさまざまな気づき生まれる学習だった。

「僕は人を助ける人になりたい」という壮一郎。壮一郎のことではクラスで何回か話しあってきた。そんな彼だからこそ、みんなの役に立つ仕事をしたい、そう思わせた十年間だったのではないだろうか。

親の願いを受けとめて

「お母さんは、バッハの曲が好きだった・・・毎日バッハの曲を聞かせていた。僕は、段々とリズムにのったように手足を動かした。お母さんは(きっと音楽好きな子どもになるだろう)と思った。・・・今の僕は、バッハの曲にはまったく興味はない。・・・」と大信太郎は書く。親の思ったとおりには子どもは育たないが、親の願いはしっかりと受け止めていたのだった。

由香里はオーストラリアで生まれた。コアラの食べ物であるユーカリから名前がつけられたという。由香里の名前に込められたこと、おじいちゃんがオーストラリアまで飛んで会いにきた。どんなにか会いたかったことだろう。由香里も、みんなが、誰もが誕生を祝福されて生まれてきた。ここに生きることの原点があるように感じた。

みんなと自分の本当の姿が見えてきた

入兼の「おしっこ事件」もそうだ。入兼大しんと丸憲たちが砂場で「おしっこをかければ川がながれる」と思って本当にやってしまった。そんな、思ったことを本当にやってしまう純粹で率直な男の子たちだった。今はどうなんだろうか?と違って彼らを見ると頭にくることはあるかもしれないけど、純粹さは持ち続けているんだなあと思った。だから本当の姿は、さかのぼるとかなり前から現れているのかもしれない。

志帆はまとめて「今の性格は、すでに赤ちゃんの時から始まっていたんだと思った」という。すごい大きな結論だと思う。だけど私は、次のことをつけ加えたい。「志帆自身が見つけ、創り続けてきたものなのだよ！」と。なぜなら、次のことが、証明してくれるだろう。志帆は、幼稚園の時のことをふりかえる。桃子に「お友達にならない？」と声をかけて、桃子も「うん」と応える。自分から切り拓く積極性をこの頃から持ちはじめていたのだ。誰かにどこかで何となくもらったものではなくて自分で作りだしたんだと、このことに私は感心してしまった。

十年という長い時を感じる

「ぼくにはいろいろなできごとがあったんだなあと思った。」と入り兼はしめくくるが、実は十年史で、あらためて心に刻んでほしかったのは、このことだった。

里奈は『青木里奈誕生』というタイトルをつけた。十年をふりかえって、青木里奈という人間が誕生したことをつきとめたんだと思う。

真帆も言う。「0才~10才までをこういう形でまとめると、すごく長い時間を感じられる」と。さらに「これから先も、いっぱい笑っていっぱい泣いて、将来のことはわからないけれど、せいっぱい生きていこうと、思います。」真帆らしい中身のいっぱい詰まった言葉でしめくくる。

しめ言葉もみごと

生まれた時に植えてもらった梅の木が今は2メートルになった。そして、白い花がいっぱい咲いている。と哲はしめくくる。大きくなって、花を咲かせることが一番の親孝行なのだが、いともあたりまえのように、にくいくらいに自然に、きれいにまとめた。

麻由は「・・・学校の生活も、友達と遊んだり、勉強ができるのが、楽しく幸せです。これから何年も、何年も、生きられるのが幸せです。麻由は、できればいいから、200才以上生きて、ゆうめいな人になりたいです。」と麻由らしい。翼は「私が二十になって二十年史を書く時には、有名なバレリーナになれてたらいいなあ。」と早くも次の十年史に向かっている。中味に力が入るとしめくくりも実にいいもんだ。

本になった

十年史の合本が出来た。484ページにもなった。子どもたちは書いた。一番多い子が400字で153枚、次の子でも127枚。多くを書いた。なぜこれほどまでに書けたのか。人が自分をいかに表現するか、いかに自分への自信と肯定感を持つか、等について子どもたちが明確な答えを出してくれたのだと私は思っている。かけがえのない自分のことである。だから自分は何ものであるか、自分にはどんな可能性があるのか、同時に新たな自分との出会いがうれしくて不思議だった。調べては書き、書きながら考えてきた。自分と自分を取りまく世界を書き続けたのだと思

った。印刷には子どもたちが手伝ってくれて3日間かかった。段ボールで5箱にもなった。1冊では厚すぎて上下2冊となった。プロの印刷屋さんに頼んでしっかりとしたものになった。「10年ひとむかし」とすれば、人生の初めのひとむかしは実に重要な初めの一步である。貴重で重要な中身が詰まった「十年史」につきあえたことだけでも私は満足している。
(小菅盛平)